

利用者の情報行動

2007-07-09

平成19年度大学図書館職員長期研修
松林麻実子(筑波大学図書館情報メディア研究科)

1

講義の概要

1. 大学図書館における「利用者」
2. 利用者の情報行動を理解する枠組
3. 実際の調査に見る「利用者の情報行動」
4. 機関リポジトリは必要か？

2

利用者を「理解する」とは

- 「(目の前にいる)利用者が抱える問題を知り、それを解決する」ための理解
⇒「感情」「個別の状況」に焦点
＝レファレンス・サービスのアナロジー
- 「図書館サービスを設計する」ための理解
⇒「全体的な傾向」「行動パターン」に焦点

サービス設計に応用可能な「理解」法
＝行動パターンの解明

3

大学図書館における「利用者」

- 「研究者(院生を含む)」
利用パターン(情報源, ニーズ)の確立
⇒研究領域との関連
- 「学部生」
研究領域, 専門知識に関する知識がない
ために予測不能な動きをする

どちらに合わせたサービスを
展開すべきか？

4

「研究者」の行動パターンの解明

- 「学部生が中心」という意識
 - ⇔学部生はどのような利用をするか？
 - －「場所としての図書館」を利用
(コピー、試験前の勉強スペース)
 - －パワープレイで問題解決
(全てサーチエンジンで検索)
 - －講義で指定された課題のために利用
(行動様式は教員の指示に基づく)

「研究者」の行動パターンに焦点をあてる

従来の利用者調査における意識

研究者の情報行動パターンを理解する

- 質問紙調査が有効
 - ⇔利用者調査はすでに実施されてきた
レファレンス・サービスの理解の延長
＝目の前にいる利用者が、
図書館をいかに利用し、何を期待するか
- 自由回答式による直接的な表現を望む
- 図書館利用を独立した行為としてとらえる

6

社会的機関としての図書館

研究者の情報行動パターンを理解する

- 「図書館をいかに利用しているか」ではなく、
「人々は日常生活（研究活動）の中で、
いかに図書館を位置づけているのか」を知る
 - －他の要素、代替物との関連を考慮する
 - －必要とする情報の形態は？
 - 様々な情報源をいかに使い分けているか？

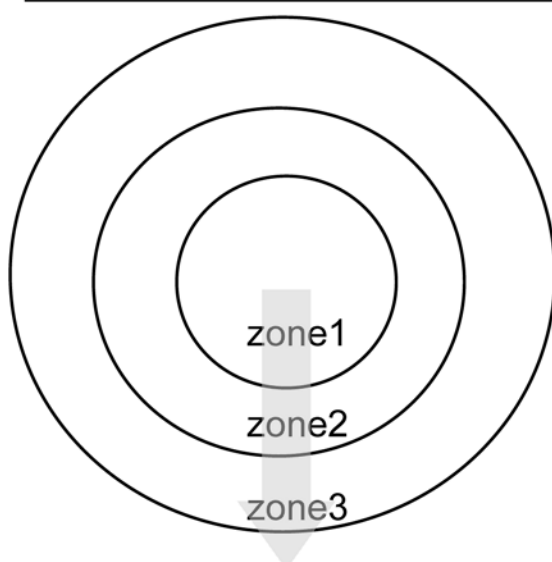
7

情報実践アプローチ

- Savolainenらが提唱
- 人々の情報行動を相互作用でとらえる
- 情報実践 (information practice)
 - ＝情報利用・探索、情報行動に代わる語
 - ＝内的に関連した複数の活動から構成
 - 情報源やチャネルの認識、アクセス
 - 情報の適合性判定、他者との情報共有
- プロセスをリニアに表現するという単純な図式にはならない

8

情報源の地平



情報源と
利用者との距離
＋
その理由

9

研究者にとっての「情報」

学術雑誌論文(印刷版)	92.5%
学術雑誌論文(電子版)	73.0%
大学・研究所のサイトにある論文	15.2%
会議論文(電子版)	2.3%
著者のサイトにある論文	5.8%
プレプリント・サーバ	4.6%
その他	0.6%

(化学分野の場合、複数回答)

10

学術雑誌の圧倒的優位性

- 学術雑誌に匹敵するメディア
 匹敵するようなものはない 25～40%
 物理学 e-print archive(41.3%)
 病理学 大学・研究所のサイト(35.6%)
- 研究者にとって学術情報を入手するメディアは「学術雑誌」(印刷版・電子版を問わず)

11

電子ジャーナルの普及

1999年調査

よく利用	18.7%
時々利用	38.5%
過去に利用	10.5%
利用しない	27.7%
知らない	3.0%

2003年調査

毎日利用	15.0%
週1回程度利用	40.4%
月1回程度利用	15.2%
ごくたまに利用	14.0%
利用しない	12.7%

12

図書館への来館の減少

- 図書館を（来館）利用する頻度が減った
「はい」の割合
物理学 78.3%
化学 78.0%
病理学 72.6%
- Webの閲覧頻度が上がったという回答は
8～9割

図書館への来館



Web閲覧

13

研究者は動きたがらない

- 自席のPCを使って、ネットワーク情報源を
探索し、利用する
日本の医科学研究者 . . . 86.2%
（大学以外の研究機関に所属の333名）

関西学研都市諸機関の研究者 . . . 86.9%
（文系から理系まで696名）

Web閲覧に切り替えた利用者が
来館利用に戻ってくる可能性は低い

14

図書館と競合するのはネット環境

- 特に理系の研究者に関しては
来館という利用形態は激減
⇔「図書館は不必要」ということを意味しない
- 図書館はネット環境に依存する利用者に
働きかける必要性
＝来館せずにサービスを享受できる枠組構築
（来てもらうという発想を捨てる）
⇔来館利用者のみを対象とするという考え方も

15

雑誌論文の入手形態

- 電子ジャーナル導入以前
雑誌のまま . . . 1～2割
印刷版の雑誌から論文だけ複写
. . . 8～9割
- 電子ジャーナル導入以後
印刷版の雑誌から論文だけ複写 . . . 2割
PDFファイルをDLして印刷 . . . 6～7割
- 「雑誌論文」単位での扱い
- ジャーナルというパッケージは意識されない¹⁶

研究者の情報入手プロセス

➤ 従来のパターン

- ① あらかじめ決まったタイトルを定期的に
ブラウジング
(コアジャーナルについては個人購読)
- ② 書誌DBを検索し、検索結果を手にも図書館に
来館、現物を複写

電子ジャーナルの導入によって変化したか？

17

電子ジャーナルの出現と個人購読

➤ 「個人購読」をやめた雑誌がある 「はい」の割合

物理学	21.1%
化学	22.2%
病理学	27.5%

➤ 重要なジャーナルについては、 学会員になるなどして、個人で入手

自分に一番近いところに置きたいと
思うジャーナルに変化はない

18

情報検索の頻度

	医科学分野	関西学研都市
毎日	44.1%	39.9%
2～3日に1回	22.5%	26.9%
週1回程度	25.5%	23.4%
ごくたまに	7.2%	8.5%
ほとんどしない	0.6%	1.0%
無回答	0.0%	0.3%

雑誌論文へのアクセス方法 (1) 関西学研都市調査

DB検索後、結果を基に印刷版雑誌を見る	31.5%
DB検索後、結果を基にEJにアクセスする	25.4%
DB検索後、結果のリンク機能を使ってEJの全文へアクセスする	10.0%
出版社・学協会のAlertサービスからリンク機能を使ってEJの全文にアクセスする	2.0%
雑誌の決まったタイトルを定期的に読む	20.7%
出版社のサイトにある論文検索機能を使ってEJの全文にアクセスする	2.8%

雑誌論文へのアクセス方法 (2) 医科学分野調査

DB検索後、結果を基に印刷版雑誌を見る	25.3%
DB検索後、結果を基にEJにアクセスする	31.5%
DB検索後、結果のリンク機能を使ってEJの全文へアクセスする	17.0%
出版社・学協会のAlertサービスからリンク機能を使ってEJの全文にアクセスする	4.0%
雑誌の決まったタイトルを定期的に読む	16.0%
出版社のサイトにある論文検索機能を使ってEJの全文にアクセスする	0.9%

研究者の情報行動

- コアジャーナルは個人購読、個人リンク
- それ以外の多くの論文に関しては
データベース検索の後、
 - ー 図書館へ来館、冊子体雑誌を複写
 - ー 電子ジャーナルにアクセス
- 電子ジャーナル利用の割合が増加傾向
＝ データベース検索⇒論文本体
という流れをスムーズにして欲しい

リンキングシステムへの期待

22

電子ジャーナルへのアクセス

図書館の電子雑誌リストから	45.6%
ブラウザに登録してあるURLから	35.8%
サーチエンジンで雑誌名を検索して	4.8%
学会や機関のサイトからリンクをたどって	10.5%
Webで偶然見つけたURLから(不定期)	1.4%
無回答	1.9%

(物理学のデータ、他分野も同傾向)

DB検索結果からリンクしてあれば、さらに
図書館サイトの利用は増える可能性あり

研究者の「情報」に対する認識

- 研究者にとっての情報＝学術雑誌
⇒ 電子ジャーナルへのアクセスが最優先事項
電子ジャーナルリストの整備

- 情報入手の局面では論文単位で認識
ジャーナルのパッケージに対する意識は低い
(タイトルが意識されるのは、論文評価の局面において)

24

研究者の情報行動パターン

➤現状でのパターン

- ①DB検索, 文献情報の入手
- ②図書館の提供する電子ジャーナルリストから必要な雑誌名を探す
- ③電子ジャーナルにアクセスし, 必要な文献を再度検索, 入手

25

ネット環境に依存する 利用者への働きかけ

- 各種DB (ex. Web of Science)で文献検索
⇒検索結果と共に入手ルートが表示される
EJの提供有⇒論文本体へのリンク
冊子体雑誌の提供有⇒複写依頼フォーム
提供なし⇒ILLフォーム
- DBから得られる文献情報と文献そのものと
をネットワーク上でダイレクトに結び付ける

26

文系研究者の行動

- 利用実態が明らかにされていない
(したがって数的根拠はない)
- 紙媒体が利用の中心
(電子化の要求はそれほど強くない)
- 「自室にどれだけ蔵書を持つか」を重視
⇒ 図書館は研究者の蔵書と自館のそれとの
バランスに意識を向ける必要

「図書館の潜在的研究支援力」という発想

27

まとめ(1)

- 利用者の「行動パターン」の把握
⇔ 「感情」「個人差」をあえて捨象
- 利用者＝研究者
- 利用者の情報行動をとらえる際に、周囲の
状況・社会的な要素を考慮する
大学図書館の場合「専門領域」が重要

28

まとめ(2)

- 意識すべきは「彼らが何を考えているか」に関する彼らの表現そのものではなく、行動の背後に透けて見える彼らの意識
- 学術雑誌を重要視、検索の多用
⇒リンクングシステムへの期待を読み取る
- PRの重要性
研究者は先入観で動く傾向
図書館の各種サービスを知らない

29

筑波大研究者の情報入手状況

- 使用するデータベース／サーチエンジン
 - オンラインデータベース 60.0%
 - Googleなどの一般的なサーチエンジン 21.2%
- 学術情報の入手状況
 - 大部分は入手可能 50.3%
 - 時々困難を感じる 30.2%
 - しばしば困難を感じる 10.0%

30

筑波大研究者の情報提供状況

- Webpageを持っているか
はい(43.0%)／いいえ(56.4%)
- Webpageで公開している情報
論文リスト(83.4%)
論文の全文(25.1%)
- 公開したい情報
学術雑誌論文(89.3%)
紀要論文(36.1%)

31

機関リポジトリに登録したい理由

- 登録したい(50.3%)
- その理由
研究成果をより多くの人に公開できる
研究・教育資源の共有化に有効
可視性が上がり、被引用数が増加する

32

機関リポジトリに登録したくない理由

➤「登録したくない」「わからない」 48.8%

➤その理由

現在他の方法で公開しており、それで十分
登録作業が面倒そう
機関リポジトリが何かわからない
著作権の問題が心配

33

まとめ(3)

➤研究者はそれほど必要としていない
＝図書館の存在意義との関連で実施？

➤機関リポジトリの実施
研究者への働きかけが重要
＝成果公表範囲の拡大が見込める
被引用数が上がるという調査結果あり

34

参考文献

- 日本の大学に所属する物理学研究者を対象として、1998年12月～1999年2月実施 回収数(回収率):571票(54.3%)
- ⇒ 倉田敬子, 松林麻実子. “第4章:物理学分野における動向”電子メディアは研究を変えるのか. 倉田敬子編. 勁草書房, 2000
- 日本の大学に所属する三分野の研究者を対象として, 2003年2月～3月実施
回収数(回収率):物理学:775票(54.3%), 化学:494票(48.1%), 病理学:541票(42.4%)
- ⇒ 松林麻実子, 倉田敬子. e-printという情報メディア:日本の物理学研究者への調査に基づいて. 日本図書館情報学会誌. Vol51, No.3

35

- 国立国会図書館委託調査「電子情報環境下における科学技術情報の蓄積・流通の在り方に関する調査研究」(平成15年度～平成16年度)の一環として, 2004年12月～2005年3月実施
回収数(回収率) 696票(41.1%)
- ⇒ 松林麻実子. “関西文化学術研究都市内研究機関に属する研究者の情報行動パターンに関する調査”. 電子情報環境下における科学技術情報の蓄積・流通の在り方に関する調査研究(図書館調査研究レポート No.4)

36